今川了俊研究の現在

石澤一志

*キーワード
今川了俊・夫木和歌抄・中央と地方・厳島詣記・国語学

はじめに

当方は本基幹研究における「関東地区」の担当であるが、本研究に先行する「学芸書としての中世類題集の研究 ―『夫木和歌抄』を中心に―」（当館共同研究・プロジェクト研究、平成一六（二〇〇四）年～二一（二〇〇九）年度）『夫木和歌抄 編纂と享受』（風間書房・二〇〇八）における活動を引き継いでいる側面が強い。よって「関東地区」担当のグループのこれまでの活動は、小林一彦「中世の夫木和歌抄」（第二回研究会、二〇一三・一二）・野本瑠美「『夫木和歌抄』と平安私家集」（第四回研究会、二〇一四・一二）・三村晃功「『夫木和歌抄』における出典注記の謎―「歌林良材」をめぐって―」（第五回研究会、二〇一五・五・二二）といったように、主に『夫木和歌抄』の考究をその中心に据えて行われてきた。稿者はそこを起点としつつ、本基幹研究の基本的な枠組みである「中央と地方」との関わりに即して視野を広げ、「関東」に地盤を持ちつつ、時の「中央」であった京都で活躍し、その命を一身に受けて九州へと西向して、政治的経営のみならず、文学を中心として文化的にも大きな足跡を残した存在として知られる、今川了俊（一三二六～一四一四頃）の存在に焦点を当て、現在の研究状況の確認と今後の研究への提言を行いたい。

今川了俊と『夫木和歌抄』

『夫木和歌抄』研究に於ける今川了俊の存在には非常に大きいものがある。何よりそれは「夫木抄の正本」を所持・伝来し、それを積極的に活用したことが知られるからである。

『夫木和歌抄』の正本を了俊が所持していたことは、徳川黎明会蔵・了俊筆『詠歌一体』（外題『和歌秘抄』）の奥書部分により知られる。[注1] この記事は夙に有名なものであるが、奥書全体を見ると、『夫木和歌抄』を始めとする典籍が了俊の西向に際し携行されたという事実を知り得る。了俊は歌道上の師であった冷泉為秀筆の典籍類を多数所持しており、これらを京から九州へと帯行したのである。

応永九年（一四〇二）八月に記されたその奥書によれば、これらは博多・安楽寺社頭に於いて一度紛失したものの、後に宮師律師なる者によって発見されたという。了俊はこの時、応安四年（一三七一）以来の九州探題を解任されて京都に戻っていたので、いづれ「路次静謐」の時分に召し上げたいが、自らの老齢を鑑みて、若し自分の存命中にそれが手元に到来しなかったならば、子孫の内、志あるものが受け取るよう言い遺し、それに備えるべく、安楽寺に預け置いてある書目を列挙したのであった。

『夫木和歌抄』は、それらの書目の最後に「〇一　夫木抄一部正本也勝田備前入道本也／此内二帖預置他所之間／今所持也」と記されている。大部分は安楽寺にあるが、その内二帖だけは別のところに預け置いてあったので、それだけは現在自らの手元に所持している、という。最終的にこれがこの後どうなったのかは現在のところ未詳だが、『夫木和歌抄』の、しかも「正本」と伝えられる、撰者（実際には編集作業者か）[注2]の「勝田（勝間田）備前入道の本」というものの所伝を示した、極めて重要な証言となっている。

さらにその後了俊は、その歌学に於ける著作である『二言抄』『師説自見集』『言塵集』『了俊日記』等の中に『夫木和歌抄』からの和歌の引用を行っている。これが『夫木和歌抄』利用の最古の例であることは注目に値する。そして同時に『夫木和歌抄』が九州にもたらされていた、という事実には大いに注目すべきであろう。その利用の様相までは具体的には知られないものの、『夫木和歌抄』が在九州の人々に披見された可能性は極めて高いものと思われる。

『夫木和歌抄』の享受を鑑みるに、成立はおそらくは関東圏であったそれが、京都へ移動し、さらに九州まで移動していた事実は、まさに「中央と地方」の関わりを考えるという、本基幹研究の基本コンセプトに最も合致したものであると言えるのではないだろうか。そしてその移動に中心的な役割を果たした、今川了俊の存在は、より強く認識されるべきものであると考える。

今川了俊研究の現在と今後の研究への提言

これまでの今川了俊研究をリードしてきたのは、何と言っても、荒木尚と川添昭二の両氏である。その業績は正に文学と歴史の両面に渉り、豊かな成果をもたらしてきた。[注3]そして、それはごく近年に於いても示されてきている。特に川添に於いては「九州探題関係文献目録―今川了俊」（『年報太宰府学』五、二〇一一・三）およびその翌年に補遺を行われており、その飽くなき研究への情熱には深い畏敬の念を抱く。

その文献目録に見られるが、前節で見た『夫木和歌抄』他歌書類を九州にもたらした以外にも、今川了俊には、数々の九州に於ける文学的事跡が知られている。

その中でも、近年の研究成果として特筆されるのが、伝二条良基筆「畠山切」と『大慈八景詩歌』を巡る、堀川貴司・別府節子の研究であろう。[注4]従来内容不明とされてきた「畠山切」が『大慈八景詩歌』をその書写内容とすること、そしてこれが清書本であることが明らかにされた。これは単に文学的な事跡ではなく、その背景に九州経営に関わる政治的意図が濃厚

に感じ取られるところの催しであったことも明らかにされており、従来の了俊研究に加えて、興味深い事実が浮き彫りとなった。

またさらに近年に於いては、軍記物語研究から『難太平記』を巡る成果が挙げられており、これもまた、文学と政治を巡る今川了俊の態度の一端として、非常に注目されるところであろう。(注5)

そして、今川了俊そのものについて、ではないが、了俊と関係の深い冷泉家についての研究は、時雨亭文庫の公開に伴って大きな進展を遂げている。冷泉家の始祖となる為相について、鍬武彦『鎌倉時代中後期和歌の研究』(新典社・二〇一二)があり、了俊との関わりがより深い冷泉為秀については、鹿野しのぶ『冷泉為秀研究』(新典社・二〇一四)という、貴重な研究成果が挙がっている。さらに、小川剛生の『二条良基研究』(笠間書院・二〇〇五)、『武士はなぜ歌を詠むか 鎌倉将軍から戦国大名まで』(角川学芸出版・二〇〇八)『正徹物語』(角川ソフィア文庫　角川学芸出版・二〇一一)、『足利義満 公武に君臨した室町将軍』(中公新書　中央公論新社・二〇一二)、『徒然草』(角川ソフィア文庫　角川学芸出版・二〇一五)などの陸続たる著作に取り上げられた人物とその内容は、全て今川了俊と深い関係が自然と浮かび上がってくるところのものであろう。

川添昭二の名著『今川了俊』(人物叢書)が世に出てから、既に約五〇年が経過している。それ以降の研究成果の積み重なりは、前述の川添作成の文献目録に示されるところでもある。それらを見るにつけても、今回の基幹研究のテーマである「中央と地方」の関係を考える上で、うってつけの人物が、この今川了俊であったのではなかったかと思わざるを得ない。少なくとも、今川了俊の研究の現在の状況を鑑みるに、これまでの蓄積を基に新たな大きな展開を見せるべき時期が来ているのではないだろうか。

今後こういった共同研究の機会があれば、ぜひこの、今川了俊を軸に据えて行うことを提言したいと考えるものである。

今川了俊筆写資料の活用

そのような提言のひとつの具体的な例として、今川了俊の筆写による資料の活用についてを挙げてみたい。

最初に言及した、徳川黎明会蔵・了俊筆『詠歌一体』は夙に有名なものであるが、これ以外にも了俊筆の資料は数多く、それらはすべて興味深い内容を示す。

稿者はかつて、新美哲彦の「伊予切」(源氏物語古注釈)集成とその内容検討に関する論考(『源氏物語の受容と生成』(武蔵野書院・二〇〇八)所収)の驥尾に付す形で、これまで報告されたことのなかった「伊予切」の奥書部分についての報告を中心に補遺的な報告を行ったことがある(「今川了俊筆「伊予切」―新出断簡の紹介と考察―」(『国文鶴見』四五、二〇一一・三))。了俊は『源氏物語』の本文研究に於いて、青表紙本・河内本の両本についての言及があり、その内容注釈についても極めて重要な材料を提供している。同時に、この「伊予切」には、ある興味深い表記が見られる。それは、句読点と濁点の存在である。

今川了俊筆の資料には、その本文に句読点と濁音記号が付されている例

がまま見られる。「伊予切」の他、近時報告された、冷泉家時雨亭文庫蔵『撰集抄』(『源家長日記 いはでしのぶ 撰集抄』(冷泉家時雨亭叢書 四三 朝日新聞社・一九九七)などは、その書写内容も含めて興味深いところであるが、稿者が特に注目したいのは、『慶應義塾大学附属研究所斯道文庫開設五〇年記念 書誌学展図録』(後に『図説書誌学 古典籍を学ぶ』勉誠出版・二〇一〇・一二)で紹介されたところの、**今川了俊自筆『厳島詣記』**(センチュリー文化財団寄託資料)である。

これは了俊著作の、正しい意味での自筆資料であり、何よりその内容が文学と政治の両面にまたがるという意味でも非常に重要な作品である。そして徳川黎明会蔵・了俊筆『詠歌一体』の奥書に名前の見られる「珠阿」なる時宗僧と同一人物かとみられる「古山珠阿」の名前が『厳島詣記』に記されているところなども、この資料の重要性の一端を示すし、先に記した如く、その本文表記にも独特な濁音表記などが見られ、[注6]他にもこの典籍の分析を通じて明らかになる国語学的事実なども、決して少なくないものと思われるのである。

おわりに

今川了俊は、これまで述べてきた以外にも様々な面での活躍が知られ、従ってより多くの方面からの考究が今後とも期待される人物である。文学だけでなく、より多方面からのアプローチが可能であるこのような人物こそ、今回の基幹研究のような場で、正面から取り上げることが必要なのではないか、というのが本基幹研究に参加した者からの提言である。稿者自身は中世和歌研究および書誌学・文献学を志す立場から、今川了俊を見つめていくことになると考えている。今後の諸研究の更なる進展に期待しつつ、自らも努めたい。

注

(1) 徳川黎明会『桐火桶 詠歌一体 綺語抄』(徳川黎明会叢書 和歌篇四 思文閣出版・一九八九)、解説・佐藤恒雄。

(2) 拙稿「『夫木和歌抄』の成立と性格—為家「毎日一首」を視座として—」(『夫木和歌抄 編纂と享受』(風間書房・二〇〇八)の中で、『夫木和歌抄』の実質的な撰者は冷泉為相であり、その資料提供及び指示を受けて、実際的な作業に当たったのが勝間田長清であったと見るべきであるとの見解を示したことがある。御参照頂きたい。

(3) 荒木尚『今川了俊の研究』(笠間書院・一九七七)、『中世文学叢考』(和泉書院・二〇〇一)『言塵集 本文と研究』(新典社・二〇〇八)、川添昭二『今川了俊』(人物叢書 吉川弘文館・一九六四、新装版一九八八)『中世文芸の地方史』(平凡社・一九八二)→『中世九州の政治・文化史』(海鳥社・二〇〇三)他。

(4) 堀川貴司『詩のかたち・詩のこころ 中世日本漢文学研究』(若草書房・二〇〇六)所収論考および『瀟湘八景 詩歌と絵画に見る日本化の様相』(臨川書店・二〇〇二)、別府節子『和歌と仮名のかたち 中世古筆の内容と書様』(笠間書院・二〇一四)所収論考。猶、本基幹研究の成果としては、小山順子「歌枕から名所へ—八景詩歌をめぐって—」(第四回研究会、二〇一四・一二)もあった。

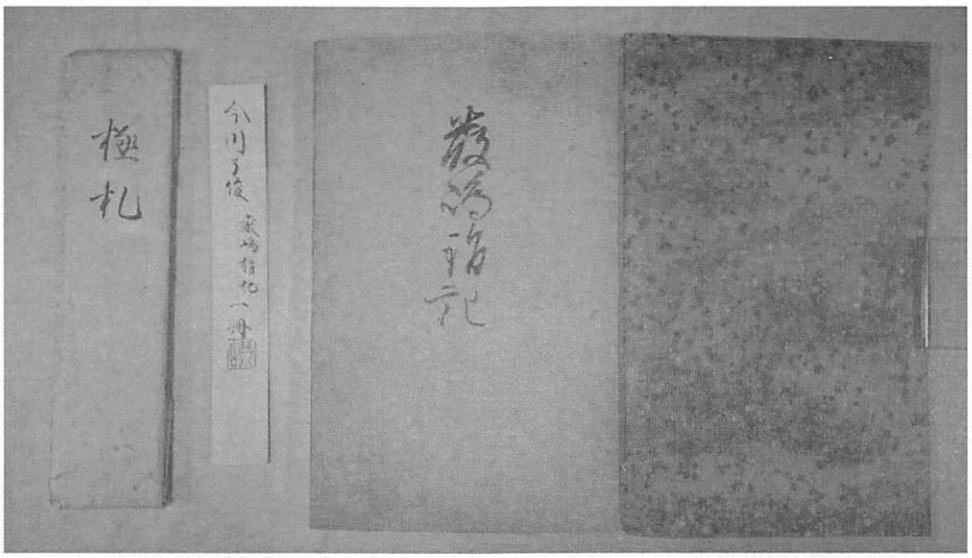
(5) 長谷川端 他『難太平記』上・下」(『中京大学文学部紀要』四一、四二-二、

二〇〇七・三、二〇〇八・三）、小木曽千代子『玄恵法印研究　事跡と伝承』（新典社・二〇〇八）、和田琢磨『『太平記』生成と表現世界』（新典社・二〇一五）など。

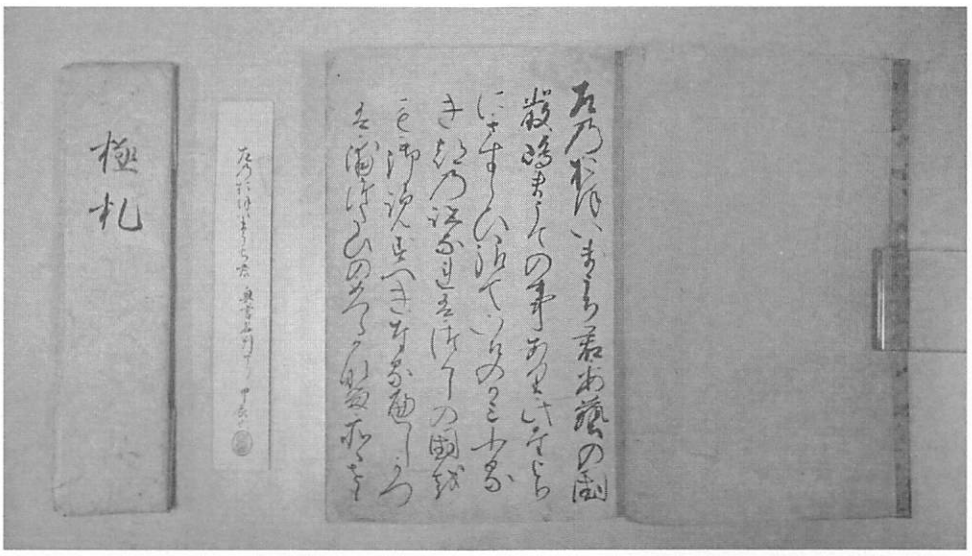
（6）この時期の濁点は、当該字に二点を付すのではなく、三点乃至四点を付すものが多い。本資料は、当初黒墨で四点の濁点を付したものを、途中から朱に切り替え、改めてその上から重書し、三点の濁点に書き改めている例が見られる。他の資料との比較検討により、その変化と意味にある程度の見通しを与えることが可能であるかもしれない。

本稿は、「短冊手鑑の内容と成立に関する研究」【国文学研究資料館　共同研究（一般）】研究代表者・中村健太郎（帝京短期大学助教）研究期間　二〇一四～二〇一六年度、および「『隠心帖』を中心とする古筆手鑑の史料学的研究」【東京大学史料編纂所　一般共同研究】研究代表者・久保木秀夫（鶴見大学准教授）研究期間　二〇一四・一五年度　の研究成果を一部含む。

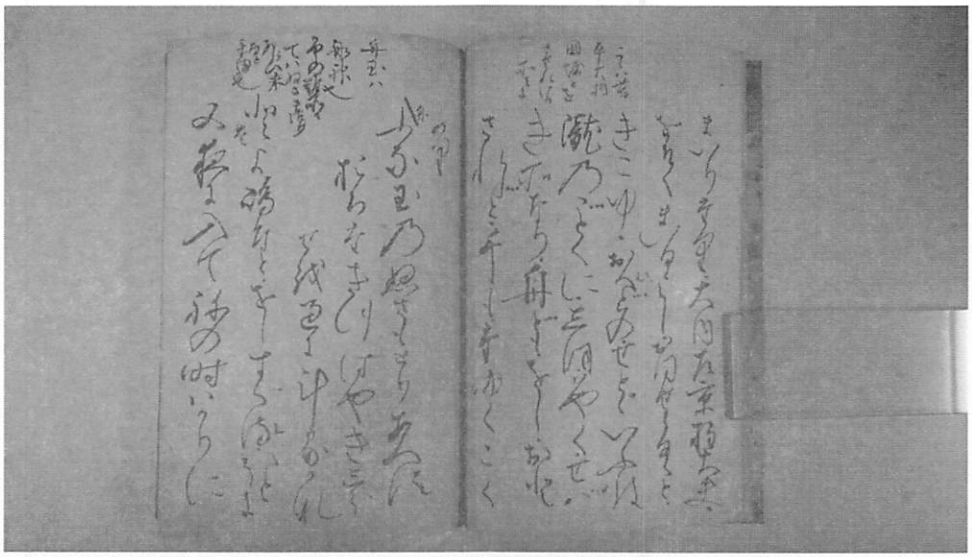
【今川了俊筆『厳島詣記』】



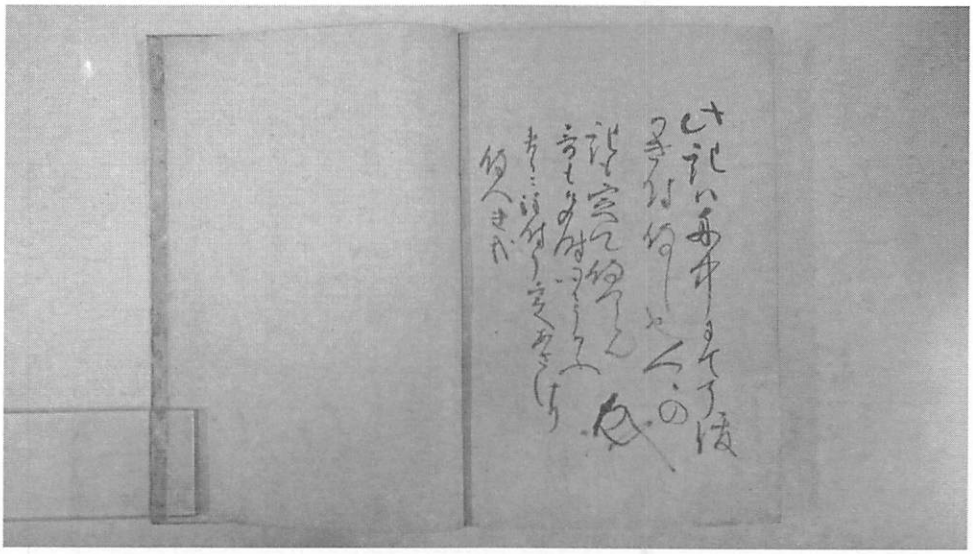
（見返し・内題）



（巻頭）



（自注・濁点等）



（奥書）